

平成 28 年度

## 病害虫発生予察情報 第 17 号

### 長期予報

北海道病害虫防除所 平成 29 年 3 月 27 日

<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/>

Tel:0123(89)2080・Fax:0123(89)2082

札幌管区気象台発表の 2 月 24 日付の暖候期予報および 3 月 24 日付の 3 か月予報は以下のとおりです。

### 北海道地方 3 か月・暖候期予報

(4 月から 8 月までの天候見通し)

暖候期 平成 29 年 2 月 24 日  
3 か月 平成 29 年 3 月 24 日  
札幌管区気象台発表

#### < 気温の各階級の確率 (%) >

4月	20	40	40
5月	20	40	40
6月	20	40	40
6~8月	20	30	50

低い       平年並       高い

#### < 降水量の各階級の確率 (%) >

4月	30	40	30
5月	30	40	30
6月	30	40	30
6~8月	30	40	30

少ない       平年並       多い

春（4月）：北海道日本海側・オホーツク海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。北海道太平洋側では、天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。気温は、平年並または高い確率ともに 40% です。

（5月）：天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに 40% です。

夏（6月）：天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに 40% です。

（6月から8月）：大気全体の温度が高い見込みです。また、太平洋高気圧の北への張り出しが強く、暖かい空気に覆われやすいため、夏の平均気温は高いでしょう。夏の降水量は、ほぼ平年並の見込みです。

上記3か月予報、暖候期予報および近年の発生状況からみた平成29年度の主要病害虫の発生予想は以下のとおりです。なお、病害虫の発生予想は毎月の気象予報にもとづいて修正し、毎月の予報（毎月末頃発表）、注意報として随時発表します。今後はこれらの予察情報を参考にしてください。なお、最盛期や評価時期が暖候期予報の期間から外れている病害虫については、長期予報に掲載していませんので、ご了承ください。

## 平成29年度の病害虫の発生予想

注1) 平年値(過去10年間の平均値)と比較し、◎:やや多～多、□:並、△:やや少～少を示す

注2) 近年の発生状況の( )は、平年値がなかったため暫定的な評価

注3) 本年の発生期・発生量の( )は、新規項目のため平年値なし

作物名	病害虫名	近年の発生状況					本年の発生期・発生量	
		24	25	26	27	28	発生期	発生量
水稻	いもち病(葉)	△	△	△	△	△	やや早	並
	いもち病(穂)	△	△	△	△	△	やや早	並
	紋枯病	◎	◎	◎	◎	◎	やや早	多
	縞葉枯病	◎	□	△	□	□	—	並
	ばか苗病	◎	◎	□	□	□	—	やや少
	苗立枯病	—	△	△	□	□	—	やや少
	種子伝染性細菌病	—	△	△	△	△	—	やや少
	ニカメイガ	△	□	△	△	△	—	少
	ヒメトビウンカ	□	□	□	□	◎	やや早	並
	イネドロオイムシ	△	△	△	△	△	やや早	やや少
	アカヒゲホソドリカスミカメ	△	□	△	△	△	やや早	やや多
	イネミギワバエ	△	◎	◎	◎	◎	やや早	並
	フタオビコヤガ	□	□	△	△	△	やや早	やや少
秋まき小麦	赤さび病	△	◎	□	△	△	やや早	やや多
	うどんこ病	△	△	△	△	△	やや早	やや少
	眼紋病	△	△	△	△	△	—	やや少
	赤かび病	□	△	△	△	◎	—	並
春まき小麦 (春まき)	赤かび病	△	△	△	△	□	—	並
	ムギキモグリバエ	□	◎	△	△	△	やや早	やや少
春まき小麦 (初冬まき)	赤かび病	△	△	△	△	□	—	並
	ムギキモグリバエ	—	—	(△)	(△)	△	やや早	やや少
大豆	べと病	□	△	△	△	△	並	やや少
	わい化病	△	△	△	△	□	—	並
	マメシンクイガ	◎	◎	◎	□	□	やや早	並
	食葉性鱗翅目幼虫	△	◎	◎	△	△	やや早	並
	タネバエ	△	△	△	△	△	—	やや少
小豆	菌核病	△	△	△	△	□	並	やや少
	灰色かび病	△	△	△	△	□	並	やや少
	茎疫病	△	△	△	△	△	—	並
	食葉性鱗翅目幼虫	□	◎	□	△	△	やや早	並
菜豆	菌核病	△	△	△	△	□	並	やや少
	灰色かび病	△	△	△	△	□	並	やや少
	黄化病	△	□	△	□	□	—	並
	タネバエ	△	△	△	△	△	—	やや少

作物名	病害虫名	近年の発生状況					本年の発生期・発生量	
		24	25	26	27	28	発生期	発生量
ばれいしょ	疫病	□	△	△	△	△	並	やや少
	軟腐病	◎	□	□	□	◎	—	並
	黒あし病	◎	◎	□	□	◎	—	並
	そうか病	□	□	□	□	△	—	やや多
	粉状そうか病	□	□	△	△	□	—	並
	アブラムシ類	△	△	□	◎	△	やや早	並
てんさい	褐斑病	◎	△	□	△	□	やや早	やや多
	根腐病(黒根病含)	□	□	△	△	◎	—	やや少
	西部萎黄病	—	—	—	(□)	(△)	—	(並)
	ヨトウガ(第1回)	△	◎	◎	△	△	やや早	並
	ヨトウガ(第2回)	△	◎	◎	△	△	やや早	並
たまねぎ	白斑葉枯病	□	△	△	△	△	やや早	並
	軟腐病	□	△	△	△	◎	—	並
	乾腐病	□	□	□	△	△	—	並
	ハ工類(タネギハ工、タネハ工)	△	△	△	△	△	—	やや少
	ネギアザミウマ	□	△	◎	◎	◎	やや早	やや多
	ネギハモグリバエ	—	—	—	—	(△)	(やや早)	(やや少)
だいこん	軟腐病	◎	◎	△	□	◎	—	並
	キスジトビハムシ	□	□	△	△	△	—	並
あぶらな科 野菜	コナガ	△	△	△	△	△	—	やや多
	ヨトウガ	△	△	□	△	△	やや早	並
りんご	モニリア病	△	△	△	△	△	やや早	やや少
	黒星病	△	△	◎	◎	◎	やや早	多
	斑点落葉病	□	△	◎	◎	◎	やや早	やや多
	腐らん病	□	□	□	◎	◎	—	やや多
	ハマキムシ類	△	△	◎	△	△	やや早	並
	モモシンクイガ	△	△	◎	◎	△	やや早	やや多
	ハダニ類	△	◎	△	△	△	やや早	やや多
	キンモンホソガ	△	△	△	△	△	やや早	やや少

## 平成 29 年度に多発が予想される病害虫

### 1. 水稻の紋枯病

平成 24 年以降、道内では夏季が高温に経過し、本病の多発傾向が続いているが、近年は本病対象の防除が実施されていないほ場が多い。平成 29 年は夏季が高温経過と予報されており、本病の発生に注意が必要である。対策として、窒素肥料の多用を避けると共に、前年に発生が確認されたほ場では、本病に効果が認められた薬剤の箱施用、水面施用あるいは出穂前の茎葉散布を実施する。

また、近年本病と症状の類似した疑似紋枯病（赤色菌核病・褐色菌核病）の発生が各地で認められている。特に、赤色菌核病は多発すると被害を及ぼす場合があるので、これまでに赤色菌核病の発生がみられたほ場では、赤色菌核病に登録（対象は「疑似紋枯症」）のある薬剤による防除を実施する。

### 2. 水稻のアカヒゲホソミドリカスミカメ

平成 29 年は夏の平均気温が高いと予報されている。7～8 月が高温に経過すると、2 回目幼虫の畦畔密度の上昇を助長し、水田内での幼虫・成虫の稲穂への加害活動も活発化することから、被害が増加する。一方、発生を抑制する降雨の量は平年並と予報されている。以上のことから、発生量はやや多めと予想される。8 月の降水量が少ない場合には加害活動がより活発化するため、基幹防除実施後は、気温・降水量や水田内のカメムシ密度に注意して防除の要否を判断する。

### 3. 小麦の赤さび病

平成 29 年は 6 月まで平均気温が高いと予報されており、本病の発生に好適な条件となる可能性が高い。主要品種「きたほなみ」は抵抗性“やや強”であるものの、近年多発生となる場合がみられている。そのため「きたほなみ」においても、止葉抽出期までに下葉に病斑が目立つ場合には、止葉抽出期から穂孕期に薬剤散布を行う。

### 4. ばれいしょのそうか病

本病は塊茎形成期に地温が 20℃以上と高く、少雨に経過すると多発する。平成 29 年は夏季が高温並雨と予報されており、注意が必要である。無病の種いもを使用するほか、種いも消毒を励行するとともにばれいしょの過作を避けることが重要である。

### 5. てんさいの褐斑病

本病は 7～8 月が高温多湿な年に発生が多く、平成 29 年は夏季が高温傾向の予報であることから発生量は平年よりやや多くなると予想される。天候の推移に注意し、今後の予察情報等を参考に適切に防除を行う。また、平成 29 年指導参考事項として、薬剤の散布開始は初発期までに行う、散布間隔は 14 日以内とすることを遵守する。

### 6. たまねぎのネギアザミウマ

本種は高温少雨で発生が多くなる。平成 29 年は夏季が高温で降水量は平年並と予報されており、発生量は平年よりやや多くなると予想される。合成ピレスロイド剤に抵抗性の個体が広く確認されており、実際の防除にあたっては同系薬剤の防除効果は明らかに低下していることから、防除ガイドを参考に他系統薬剤の組合せによる防除を行う。

### 7. あぶらな科野菜のコナガ

平成 29 年は夏季が本種の増殖に好適な高温に経過すると予報されており、本種の発生がやや多くなると予想されるため、発生経過には注意が必要である。平成 25 年以降、コナガを含む鱗翅目害虫に対する卓効剤であったジアミド系薬剤抵抗性個体が確認されている。また、道内においてもジアミド系薬剤を多用すると当年中にその防除効果が低下することが確認されている。防除にあたっては、異なる系統によるローテーション防除を行うとともに、防除実施後の効果確認、防除効果が得られていない場合の他系統薬剤による防除実施を心がける。

## 8. りんごの黒星病

本病は、ほとんど発生を見ない年が続いていたが、平成 28 年は一般園においても被害が発生した。平成 29 年は春季から夏季の降水量が平年並と予報されているが、感染源となるり病葉や芽での越冬菌が多く残っていると推察されるので、平年より多い発生が予想される。8 月以降も本病に対する薬剤散布は間隔が開きすぎないように行う。

## 9. りんごの斑点落葉病

近年、本病に感受性のデリシャス系品種が栽培されている渡島、留萌地方において多発傾向が続いている。平成 29 年は夏季が高温傾向と予報されており、平年よりやや多い発生が予想される。天候の推移に注意し、今後の予察情報等を参考に適切に防除を行う。

## 10. りんごの腐らん病

近年、本病の多発傾向が続いていることにより伝染源密度は高いと考えられる。病患部からは冬期間を除きほぼ通年孢子が分散されるため、り病枝の切り落としおよび病患部の削り取りを行い、切り取った枝や削り取った樹皮は園外に持ち出して適正に処分する。病原菌は主に傷口を侵入門戸とするため、樹体の損傷を抑える栽培管理を行うことはもちろんのこと、削り取った傷口、せん定・摘果などによってできた切り口には殺菌剤を含んだゆ合剤を塗布するとともに薬剤散布も行い、本病に感染しないよう管理する。

## 11. りんごのモモシンクイガ

平成 28 年は、本種による被害量は少なかったことから、越冬量は平年に比べやや少ないと推察される。しかし、平成 29 年は 8 月まで高温傾向と予報されていることから、本種の発生は早まるとともに、産卵活動は活発化してやや多い発生が予想される。防除にあたっては、被害果の回収および水浸処理など耕種的防除に努め、防除ガイドを参考に薬剤の散布を行う。

## 12. りんごのハダニ類

多雨に経過した平成 28 年は、リンゴハダニ、ナミハダニともに発生量は少なかった。両種ともに越冬密度は低いものと推察される。しかし、平成 29 年は 8 月まで高温傾向で降水量は平年並と予報され、ハダニ類の発生には好適であると考えられる。一世代の期間が短いハダニ類は好適条件下では短時間で密度が上昇することから、発生はやや早まるとともに、やや多い発生が予想される。降雨が少なく経過した場合には特に注意が必要である。ハダニ類は薬剤抵抗性を発達させやすいため、薬剤防除にあたっては、防除ガイドを参考に、異なる系統の薬剤によるローテーション防除に努める。

発生量が平年より多めとなることが予想される上記病害虫の他、平成 28 年に多発した「秋まき小麦のなまぐさ黒穂病」の発生状況にも注意し、適切に対応してください。